

A-Lab Artist Talk

出演 大洲大作、川崎誠二、小林哲朗、品川美香、三枝愛
司会 吉川直哉（大阪芸術大学客員教授、A-Lab アドバイザー）
日時 平成 30 年 8 月 25 日（土）午後 2 時～午後 4 時
場所 あまらぶアートラボ A-Lab room1



左から、大洲さん、三枝さん、品川さん、小林さん、川崎さん

それぞれの活動について

吉川直哉（以下 吉川）： いっぱい話を伺いたいことがあります。まずお一人お一人の自己紹介も兼ねて、どういうふうに作品を作っておられるのか聞きたいです。では、小林さんからいきたいと思います。

小林哲朗（以下 小林）： 写真家の小林哲朗です。よろしくお願ひします。僕は工場の夜景とかを撮っています。一眼レフで撮ったものもありますし、ドローンを使ったものもあります。ドローンを使うと今まで見たことのない視点で撮影ができます。今回の展覧会のタイトルは「それぞれのリアル」ですが、僕は日常生活というもののの中にリアルを感じます。日常生活をドローンという鳥の目線から見ると新たな発見がある。だから僕は絶景とかを撮るのではなく、工場とか、団地とか、街並みとかを撮影することが多いです。

吉川： 今回出展されている団地の写真は、たくさ

んの写真が合成されているとか。

小林： そうなんです。ドローンにパノラマ機能があって、現場で写真を21枚撮影して、それを合成すると解像度の高いパノラマ写真が出来上がるんです。展示しているものを見てもらえれば、窓の一つ一つまで綺麗に写っていることがわかります。この団地、僕の住んでいる近所でかなりリアルな生活圏の中にあるんですけど、撮影の3日後に取



小林哲朗さん

り壊しが決まっていた。時代の変わり目というか、昭和感がすごくいい場所だったので、そういうものがなくなるという寂しさから、最後に記録をさせてもらいました。工場の夜景も同じで、21枚合わせっています。工場夜景は真っ暗になると、建物の輪郭とか照明の当たっていない部分が潰れてしまって見えにくくなるので、真っ暗になりきる前の5分くらいの間を狙って撮っています。連続飛行時間に限りのあるドローンを、ちょうどいい時間にちょうどいい所に飛ばしていないといけません。だから実は、かなりシビアな撮影なんです。他にも、RICOH THETA（リコーシータ）という、ワンシャッターで360度全周撮れるカメラも使っています。なかなか見たことのないような、現実なんですけど現実じゃないような撮影ができたかなと思っています。

吉川： これは、このカメラでしか撮影できないんですか。

小林： 360度撮れるカメラはいっぱいあります。ただ、このTHETAがシステムの非常に優秀で、スマートフォンとすぐ連携ができます。小型で手軽に撮影できるところがいいです。

吉川： また後で色々伺いたいと思います。今日はここにドローンを持って来ていただいていますので、最後にドローンでの撮影の様子も見せていただく予定です。では、品川さん、どうぞよろしくお願ひします。

品川美香（以下 品川）： 品川と申します。私は熊本県出身で、田舎で育ちました。来年の大河ドラマ「いだてん」の主人公、金栗四三さんが高校の先輩になります。母が保育士なので、小さい時から子どもに触れ合う機会が多くて、その影響で今も子どもの絵を描いているのかなぁと思います。今回展示させていただいている作品は、大学院の時に制作したもので、私が今まで描いた中で一番大きな作品です。制作方法は、毎回ちょっとずつ違っ



吉川直哉さん

ているのですが、まずスプレーやアクリル絵の具で背景を描いて、その後に人物を描きます。人物は、白黒や茶色系のモノトーン、「グリザイユ」で描いた後に色を乗せています。アクリル絵の具と油絵の具、スプレーなど、異なる種類の画材を使っています。ランダムサンダー（電動やすり）をかけて下の層を見せていたり、マスキングしてスプレーしたり、いろいろな技法を使って描いています。

吉川： サンダーで下の層を削り出しているということですね。

品川： はい。意図的に違う色を何層も重ねて塗っておいて、やすりをかけて下層の色をチラッと見せます。その意図しない偶然の違いによって、全体を見ても面白いけど、細部を観察しても何か発見があるような作品にしたいと考えています。描かれた子どもにはもともとモデルがいるんですけど、フォトショップで少し加工したりしていますし、手で描いているので何回描いていても同じ顔にならないんです。それがすごく面白いなと思って、何回も同じ子を描いています。モデルはいるんですけど、誰かの肖像画というわけではなくて、普遍的な子どものイメージを描いています。誰かに似ている、とか、自分の子ども時代に似ているとか、思い思いに連想していただけたらいいなと思っています。なので、男の子か、女の子か、性別がどちらともとれるような意識で描いています。



品川美香さん

私に似ていると言われることも多いです。

吉川：作品の背景は何か意味があるのですか。

品川：蜂と花、ストライプとグラデーションで構成しています。例えば蜂は、アインシュタインの「蜜蜂がいなくなったら、四年後に人類は滅びる」という言葉をきっかけに選んでいます。近年になって蜜蜂が一斉になくなっているということがニュースになっています。花と蜜蜂には生態系というキーワードがあったり、背景のストライプは時間を意味していたりします。

吉川：ありがとうございます。次に大洲さん、作品の説明をお願いします。

大洲大作（以下 大洲）：私の作品は写真をメディウムとしていて、このご近所にお住いの方でしたら、作品を見て「あ、淀川だ」と分かるかもしれませんが。実際に作品の一部は、JR 大阪駅から塚本駅に至る所の淀川を写したものです。列車の車窓をモチーフとして制作しているのですが、近年は、列車の車窓から撮った写真をスライドショーの要領で、実物の列車の窓にプロジェクターで映し出すというインスタレーションを展開しています。一見すると、モニターがぶら下がっている、もしくは額縁がある、というように見えるかもしれませんが、近寄ってよく見てみると窓を開閉するレバーが付いていたりして「あっ、私は今、本物の車窓を見ているんだ」と気付くようなかたちです。私は作

品を展示する場所にゆかりのある車窓をお見せしたいと考えていて、それはご覧になった方に「あれ、これはもしかして普段見ているものじゃないのか」と思っていたかもしれないから。車窓とは、普段見ているようで見ていないもの、見ていないようで実は、チラッと目の端に入ってきているものです。わざわざ見ることは少ないけれど、よく見てみると「自分たちの街はこんなふうに見えるのか」という気付きにつながれば嬉しいです。

吉川：では次は、川崎さんです。ルーム 3 で展示されておられます。

川崎誠二（以下 川崎）：木彫りでそっくりなものとかを作っています。僕が作家活動を始めたのはツイッターがきっかけですので、作っているところをどんどんツイートしていて、それを見ていただくと制作の様子が分かると思います。今回は尼崎で展示ということで、ここにゆかりのある一寸豆などを作りました。そのために、豆を買ってきて鞘を切って中を見たのですが、それだけでもいろいろと発見があって。「あ、ふかふかした中に入ってるんだ」とか「結構かわいい形なんだな」とか。そこからどんどん木を彫り出します。僕がしていることって、元はただの木の塊だったのが徐々に削られていって、例えば一寸豆の場合だと、だんだん一寸豆に見えるようになっていく。さらにいくと、一寸豆にしか見えなくなる。そこがー



大洲大作さん



川崎誠二さん

面白いので、それをネット上で一緒に楽しんでいただくという感じですね。色はアクリル絵の具で付けているのですが、なかなか難しくて。僕は大学での専門が土木だったので、美術専門の人からしたら当たり前なのかもしれませんが、目で見ている色っていうのはなかなか分からないんですよ。見えてるんだけどよく分からない。この色を作りたい、と思ってもなかなか作れない。何層も塗り重ねることで色味の変化を出すとか、下が透ける感じの色にすると工夫しています。

吉川：最後に、三枝さんお願いします。

三枝愛（以下 三枝）：一つ前の展覧会『Artist Gate2018』で展示させていただいていた作品を、展示替えをしつつ継続するという形で参加しました。前回、お越しになった方には繰り返しのになってしまうのですが、埼玉の実家がしいたけ農家をしています。関東平野で原木栽培をするには、東北から木を買って菌を植えて育てますが、東日本大震災に伴う原発事故の影響で原木不足が続いていたんです。一本の原木から3年間はしいたけが生え続けるのですが、2011年の震災から3年後の2014年頃には震災以前の原木のほとんどが使えなくなってしまいました。その頃から実家の庭が自分の思っている景色とは変わってしまいました。遠くの事故によって自分の生まれ育った環境が変わっていくということを目の当たりにして、

そのことを作品にし始めました。

前回と今回の展示に使用している原木は、菌を植えるつもりで途中まで穴を開けたところでなぜか、2年間ビニールハウスに放置されていたものです。残されていたその木を、昨年、「AAIC2017(清流の国ぎふ芸術祭)」に参加する際、岐阜県美術館の庭園で展示するために黙って持ち出したのですが、よく見ると一部、朽ちていたんですね。ただ使えないから置いてあった、そういうものでした。それから丸一年、京都のアトリエに箱に入れたまま置いていたんですけど、また展示しようところに持ってきて箱を開けたら、樹皮と木の間の薄皮みたいな部分が全部虫に食べられていました。それで一度原木を持ち帰って、皮を剥がしたんです。Artist Gate では、裸になった原木を紙座布団にのせてゴロンと展示したんですけど、今回はこの皮で糸と布を染めました。最初は真っ白だった糸と布が、糸は銅媒染で茶色く、布は鉄媒染でグレー調に仕上がりました。さらに近所の帯屋さんから卓上の機織り機を借りてきて、染めた糸で紐を織っていったんです。何をしていたのかというと、虫に食べられて皮のなくなった木に、もう一度新しい皮を作るということです。

ここ数年、制作の中で考えているのが「ものを残すための手立て」ということです。それは、ものそのものというよりも、そこに込められた人の意志を残したいということです。ものに関わった人の気配みたいなものを定着させることが大切で、木の皮が失われてしまっても、その色が新しい素材に定着して、それが元の木に添えられているという状態もありなんじゃないかなって。

制作のバックグラウンド

吉川：この展覧会のタイトルは『それぞれのリアル』です。作品を作るということは表面的なりアリティだけではなくて、そのバックグラウンドにあるリ



三枝愛さん

アリティ、つまりそれぞれの表現の根源みたいなものが重要で、そのことについてもう少し深くお聞きしたいです。川崎さんが木を使って表現しようと思った、そのスタートはどこだったのですか。

川崎：きっかけは、中学生の姪が夏休みの宿題で木のトーストを作っていたことです。その木のトーストというのは、ほとんどただの木の板で、僕ならもっとトーストラしくするのにと思って作ってました。それをツイッターにあげたところ結構な反応があって、テレビの取材があったり、ネットニュースになったりして…。

吉川：姪の宿題を自分のこととして、「リアルに見せたい」と思ったのはなぜですか。

川崎：その時は、トーストをすごくリアルに作りたいと思ったわけではなく、ただ、トーストを作るならこう作りたいな、ということでした。その後、何作か繰り返す中でどんどんリアル度が増してきました。初めに作ったトーストに対して「本物みたい、そっくり！」という反応が多かったので、「じゃあ、次はよりいいものを作ろう」みたいな感じでリアル度が高まってきた感じです。僕はもともと現代美術につながりがなかったので、ネットで発信するのが基本というか、発信ありきでした。それまでいろいろなことをしていたんですけど、これで喜んでもらえるならこれを本格的にやってみよう、と。

吉川：小林さんに聞きたいんですけど、写真家にはいろんなものを撮る人がいますしスタイルもいっぱいあります。小林さんは現実の風景を撮っていますが、夜景や空撮など、現実を少し超えるようなところに興味をお持ちなんでしょうか。

小林：僕は廃墟を撮り始めたことが写真家になるきっかけだったんです。廃墟を肉眼で見るのもいいんですけど、写真にすると心にグッとくるものがあるということに気づいて写真にはまりました。レンズを通して見るからこそ、日常の世界とは違って見える。日常のものを写して、すごいなって思われる写真を撮りたい、というのが自分の中のテーマにあります。

吉川：今、写真にはまったと言いましたが、それ以前は写真にははまっていなかったということですか。

小林：はまっていなかったですね。昔、カメラ付き携帯電話というものが出て、それで写メをパシャパシャ撮っていたくらいです。その後に、デジタルカメラが始めました。200万画素とか300万画素のコンデジというやつで、それではまりました。その時から機材はどんどん変わっていますが、やっていることは一緒です。ドローンも使っていますが、ドローンを使いたいから撮っているわけではなく、撮りたいものを撮る方法としてドローンがある。新しい物好きと思われる節があるんですが、そうではなくて、撮っているもののテーマはあまり変わっていません。

吉川：写真家になられる前は、何をしておられたのですか。

小林：保育園で保育士をしていました。よく「保育士として働いていたことと写真に何か共通点があるのですか」と聞かれますが、全く共通点がなくて。

吉川：写真家になって後悔はないですか。

小林：今のところはやっていけていますけど、社

会保険もないですしねえ（笑）。その辺が不安ですけど、やれるとこまでやろうかな、と。

吉川：ぜひ夢を持って続けてください。品川さんは、このような大きな作品を作るには、アトリエの確保からして大変ですし、体力的にも、画材の量も多くて、相当エネルギーが必要ですね。

品川：そうですね、大きいと力仕事が多くてすごく疲れます。

吉川：どのジャンルの方もそうですけど、絵を描くというのは単純に描いているわけではなくて、そこに至るまでの準備や研究、フィールドワークとか、いっぱいありますよね。

品川：最近は、母の畑仕事を手伝ったり、実家の近所子どもたちと遊んだり、当たり前の日常を大切にしています。直接的にそれが絵になるということがなくても、日常生活から発見があると思っています。

吉川：ありがとうございます。三枝さんはこの展示会の会期中にワークショップをされましたが、いかがでしたか。

三枝：竹和紙にシルクスクリーンで刷った原木の絵に、しいたけを描くワークショップをしました。現実には使われなかった原木でしたが、イメージで、絵を描くことで、しいたけを生やすことはできます。そしてそれが、原木にとっての弔いにもなるんじゃないかと考えました。参加者には、どうしてこの木が今ここにあるのかという話をして、一緒に絵を描きました。子どもにそういう話をするのは初めてで、しかも尼崎という土地があまりにも東北からかけ離れていて、どういう感じになるのか心配しましたが、しいたけそのものに対するリアリティっていうのはみんな持っていて、そういった話を聞くことは興味深い経験でした。

ただ、ずっと引っかかっていることが一つあって、展示作業も子どもたちと一緒にやったんですね。最後に、展示を見ながら感想を言い合う時間を作っ

たんですけど、想像でしいたけを描くというワークショップだったので、しいたけを自分の好きなキャラクターに当てはめて描いた子がいたんです。その絵を見た別の子が「被災した人の気持ちを考えて描いているんですか」って聞いたんです。私はその時、何も言えなくて。でも、そこで言われている「被災した人たち」っていうのは誰なのかとか、この子は誰に対する配慮でこの質問をしたんだろうとか考えたんですよ。もしかしたら、私が被災したと思っているのかもしれない。この木が被災したと思っているのかもしれない。でもどちらもそうではない。その場にいたのは埼玉のひと、群馬の木なんです。ただ、2011年の3月にうちに届くはずだった原木は、確かに被災しているんですね。トラックに寄せられる直前で被災した原木は、そのまま放置されて、朽ちて消えてなくなっているはずなんです。しいたけを生やすために絶たれた命が、もう無意味になってしまった。そのことを思い出して、「私はあの木たちのことを考えて作品を作っていたのだろうか」と考えたりしました。

吉川：子どもの発言は、胸に迫りますよね。

三枝：吉川さんはファミリーアルバムを複製して作品にされたりもしていますが、そのカタログを見て、写真についての原体験を思い出しました。今回の展示で、和室の床の間に飾っている写真、あれは私の実家の作業場に飾られている写真を、もう一度写真に撮ってからコロタイプで印刷して、さらにそれを彩色したものです。それが何かと言うと、家に市長が視察に来たときの写真です。当時私は4、5歳くらいで、市長が父の話を「なるほど、なるほど」って聞いているんですけど、なんかそれを見ていて「全然なるほどって思っていない、この人」って思って、一体何しに来たんだろうとか、私はこの庭のことをとっても大切に思っているけど、この人にとっては多分どうでもよく

て、写真を撮って視察した証拠として新聞に載せて、それで仕事できた、ということなんだなと思って、それがすごい嫌だったんですよ。そして、そこに自分がいたということを残したくて、何かで抵抗したくて、カメラマンが写真を撮る瞬間にその当時お気に入りを持ち歩いてた下敷きで顔を隠す、みたいなことをずっとやっていたんです。そしたらその中の一枚がまだ残っていて、家にも飾られていて。それについて、誰にも何も言われないんですけど、ただ私だけがそのことをずっと覚えている。これが私にとって一番最初の表現行為と言えるんじゃないかって思っています。さらにそれは、私にとってのカメラとの出会いであり、写真との出会いであり、社会との出会いだった、他者との出会いだったと思います。

吉川：なるほど。子どもって、大人から見れば何も考えてないようできて、しっかりとものを見ている。身に迫る感じがします。大洲さんの作品ですが、そもそも車窓に注目されたのはどういうところからですか。

大洲：写真を撮るさらに前のことからお話しした方がいいですね。私は、尼崎の隣の塚本で生まれ育ちました。国鉄も阪急も走っている所で、父が私をあやす時に、塚本駅まで行って電車を見せてくれたんですね。そうしていると、なんとなく鉄道に親しみが湧いてくるもので、ただ、いわゆる鉄道少年みたいな熱心な気持ちはなかったです。でも、子どもがよくやりますよね、列車のシートに膝立ちするようにして窓の外をずっと見るっていう行為。それが原体験にあります。それが多分、自分にとって最初の、そして一番フィットする世界とのインターフェースになっていたと後になってから気付きました。写真については、子どもの頃から家に古いカメラがあって、それをいじくって遊んだり、父が写真を撮る時にシャッターを切らせてもらったりしていました。それで写真って

面白いなって思うようになって、大学で写真部に入りました。そこではモノクロのフィルムを現像して、焼き付けしてということをやっていたんですけど、さて、じゃあ何を撮ろうか、自分が何を撮りたいのかが分からなくなったんですね。そんな時に、中川繁夫さんの写真の講座があったので、それに通うようになって、そこから意図やコンセプトから考えて、写真にきちんと取り組み始めました。その頃は、自分の胸を打つ風景を探して撮る、ということをしていたのですが、ある時、探すために移動する時間と空間、電車に乗って窓を見ていることそのものが、自分にとっては一番大事なことなんじゃないかっていうことに思い当たったんです。そこから、だいたい10年くらいかかって今のシリーズになりました。

吉川：目的じゃなくて、そこに至る進行形の移動、そっちに興味があったと。

大洲：写真って、目の前に被写体が、光にあたっている何かがないと撮れない。逆に言うと、それが撮れてしまう。カメラで何を撮ろうか、ということではなく、自分にとってフィットするものを表現する方法が、自分の目で見て、写し取って、定着させる写真だった。

吉川：写真というメディアについてのお話がありました。写真はカメラのシャッターを押せば写るんですけど、そこに写っているものは世界の解釈の仕方です。この5人のアーティストたちのメディアや方法論はもちろん違いますけど、自分の身の回りの世界をどう理解するのかという共通のことを、違う形で表現しているという気がします。

お互いに聞きたいこと

吉川：全員揃われたのは今日が初めてで、お互いの作品にも興味をお持ちだと思います。これは聞いておきたいということはありますか。

川崎：品川さんに。蜜蜂と子どものつながりにつ

いて僕が想像したのは、蜜蜂は自分たちのサイクルを送りながら人間社会の維持にも寄与していて、一方の子どもは、人間の社会を維持するためには次の子どもが生まれて、というサイクルを維持していかなければならない。そういう兼ね合いかなと思いました。

品川：私は何事もつながっているって日頃から思っています。子どものポートレートも10年くらい描いていましたが、観てくれる人たちが「かわいい子どもが好きなのね」で終わってしまうことが多くて。私は「人間とは何か」とか、「自分とは何か」とか、いろんなことを込めて描いています。絵を描くときも、日常生活のなかで自分一人ではどうしても解決できない、切実な問題がきっかけになっています。社会的な大きな問題のときも、すごく個人的な問題のときもあります。なので、もうちょっと自分の作品をいろんな人に開いていきかった。そのために、読み取るきっかけを増やして、色々なモチーフを組み合わせています。子どもは、「七つまでは神のうち」という日本で昔から言われている言葉があって、これは7歳までは半分向こう側の存在という意味です。実際に子どもと関わっていると、すごくかわいい面と残酷な面があって、多面性を感じます。蜂にもそういう多面性を感じるので描いています。

吉川：なるほど。では他には。

小林：川崎さんはSNS発信をされていますよね。僕も、もともとブログで廃墟の写真を発信していたんですけど非常に面倒くさい。自分がこうして撮影していますよという状況を、わざわざ撮らないとダメじゃないですか。つい忘れてしまうんですよ。そうすることで作業量が増えるわけですし、それをやるモチベーションはどういうところにあるのですか。

川崎：木彫りを始めるより前に、SNS 廃人的な（笑）。普通にしゃべっているような感じで、いろ

いろと上げていくのが楽しくて、見てもらおうという努力はあんまりしていないんです。「SNS 発信してます」って言うと、よく他の作家の人たちが「あー、私も頑張んなきゃなー」って言うんですけど、僕頑張ってるんです。なんか言うとなんか反応があるし、普段孤独なのでそういう場があると嬉しいです。

品川：皆さんにお伺いしたいんですけど、私は週に二日大学に教えに行っていて、あとは絵を描いたりして過ごしています。皆さん全然違う作品形態ですが、一週間とか一年間のどんなサイクルで制作・生活されていますか。

川崎：僕は東北大からドロップアウトしてしまい、実家に戻ってアルバイトをしたりして過ごしていました。ようやく木彫り作家としてやっていけるかな、という感じになってきたので頑張っているところです。一応、専業でやっています。

小林：僕も写真一本でやっていますが、作品だけでは難しいので、商業的なものも手がけています。ちょっとずつ、商業的なものと作品的なものの割合を、作品的なものが多く占めるようにしていきたいです。作品的なものは展覧会での展示の他にも、雑誌であったり、撮影イベントであったり、写真提供だったりしますが、なかなか先の見通しが立たないですね。

三枝：私はこの春に大学院を出たばかりで、まだ今後どうなっていくのか不安定なのですが、今年の2月から京都市内で出土した埋蔵文化財を実測したり、拓本をとったり、整理する仕事をしています。そのきっかけは、京都を拠点にし始めた頃に仏像修復のアルバイトを始めたことです。仏像は「伝来品」、みんなが大事に信仰してきたもので、この先も絶対に残していけないといけないという強い念のこもった「作品」ですよ。それを修復する現場に立ち会うことができるのは、とても貴重な経験になっています。でも、私が「作品」と

して扱っているものたちは、人からみたらゴミみたいな、誰かが要らなくなったものだったりします。そういうものは、どのように人と関係を結んでいけばいいんだろうと考えたりして。それと同じように、土の中に眠っていたものは、もともと人が作ったものかもしれないけれど、何百年も人間との時間と切断されて、もの自体が別の時間を歩んできたのに、人の一方的な事情でいきなり掘り起こされて、人間の時間の方に引き戻されてしまった。それってどういうことだろうと、埋蔵文化財に興味湧いてきたんです。コンスタントに働く機会を得たので、それでうまいこと社会保険にも入れました（笑）。

大洲：私は朝の9時から夕方6時まで、東京の企業でIR、広報に関連する業務に携わっています。社外、社内に情報発信していく際の撮影を担当しています。仕事内容は制作とは全く関係ないのですが、ずっとシャッターを切り続けているということと、それ以上にもしかしたら大切なことは、月曜日から金曜日まで通勤をしていることです。この典型的な行為は社会との接点でもあると思うんです。自分で望んで移動するわけではない移動をずっと続けている。車窓からはすごく綺麗な風景が見えるとか、旅行パンフレットには書いてありますが、実際にはちらっと見えるだけで、ほとんどはどこかの山中であったり、人家の辺りを走っているわけです。そっちの方が圧倒的に多い。旅先でもそうですし、日常でもそうです。そういうものを見続けているわけです。そういうふうにもものを見ている、ものに出合っているという経験を、ずっと人間はしている。でも、そのままならなさが人生のメタファーだと思っています。大事なものは、そのままなら移動の時に、列車の車窓を熱心に見ていても面白いものなんて見えない、ただ、そういったものの蓄積が、見ていた時に考えたことや感じたこと含めて、その人を形作って

いると思うんです。通勤の時にちらっと見える風景だったり、通勤の時に思ったりしていたことって、案外、自分たちの人生に影響を及ぼしているものだと思いますか、ということです。そこが、観ていただく人との接点になるんじゃないかな。そのすごく狭い、共振のポイントに賭けている作品だったりします。間口が狭いようでいて、ひょっとして広いのかもしれない。ひょっとして普遍性を獲得しうののかもしれない。そういう社会とのつながりの一つになっているのが、通勤という行為なのかもしれないと思っています。

吉川：アメリカの女性写真家、アニー・リーボヴィッツが、幼い時からずっと車で移動していたので、「車の窓枠から社会を見ていた」というようなことを言っていました。通勤の間は、ずっと車窓を眺めているのですか？最近ではみんなスマートフォンを見ていて、ほとんどの人が窓を見ていないんですよ。

大洲：寝ている時がありますが、やっぱり見てはいます。ただ、東京の混雑は関西と比べものにならなくて、人の頭しか見えないことの方が多いですけどね。

吉川：分かる気がしますね。電車が混雑してくると、人の顔をジロジロと見ているわけにもいかない。どこかにピントを外して見えないといけない。そうすると、人越しにわずかに見える車窓を見るしかない。

大洲：以前、さいたまトリエンナーレで発表した作品のひとつでは、皆さんに「心に残る車窓の風景を教えてください」と募集をして、それを基に撮影しました。それは苦業のように大変だったのですが、人間というものは一瞬でものを見ているんだな、ということが分かって面白かったです。パチンコ屋の屋根の上にある大きなライオンの像だとか、高速道路の橋桁の間にキングコングみたいなものが見えるとか、同じものが気になるとい

う人が何人もいたんです。そしてそれを撮りに行くんですけど、シャッターを切ってもほとんど写らない。人間の目ってすごくて、シャッターを何千分の1秒とかにしようやく撮れるものを見ているんです。そういう一瞬の景色が、心に残る車窓の風景の典型的な例でとても興味深いです。ちょうど今、阪神電車から建造中の尼崎城が見えますが、尼崎車庫から尼崎駅のプラットフォームに入るまでの一瞬しか見えませんよね。

吉川：医学的には、人間の目は20分の1秒くらいしか見えないんですけど、アスリートとか、時速200キロで飛んでくる球の回転が見えたりしますよね。人間の能力は果てしないものがあります。

大洲：小林さんの作品を見ても思うのですが、ドローンの空撮は人間の視覚を拡張するものですが、ではああゆうふうの世界を認識したことがこれまでなかったのかと問われると、そうじゃないんじゃないかと思います。人間の目というレンズはバリフォーカル（可変焦点）であり、ズームが効く。これを見ようと思ったら、それにズームしていくことができるんですね。そういうことの延長線上に、ドローンの視点もあると思うんです。

川崎：僕も、見えないけど見ている、といったことがすごく分かります。じっくりと、ずっと見ることで初めてわかるものも、実は見えていますよね。よく、ずっと見ることで初めて見ることでできた要素を入れるか入れないかで、作品のリアリティがまるで違ってきます。

吉川：パンの表面の焼けた感じを彫っていると、イースト菌がどうやって発酵してどう膨らんだのかにまで思いをはせることになる、理解をすることになる、と控え室でおっしゃっていましたね。

川崎：観察していくとだんだん、どうしてその形ができたのか、中でどういう変化が起きたのかまで想像するというか、見えてくるというか。

吉川：だから表面だけじゃないんですよ。皆さんの話でもそうですけど、ヴィジュアルだけじゃないんです。その中身というか、プロセスの全てが表面に出てきている。そういえば、品川さんは普段どうしているのか、という質問でしたよね。

品川：私は週に2日、母校の大学に教えに行っていて、という話ですよ。ずっと家にいると何をしているのかよく分からなくなってしまうので、週に2日くらい外に出る機会があるのが自分には向いていると思っています。あと、作品はいつ売れてどれだけの収入があるのか予想できないので、コンスタントにやっていく仕事と並行していくことが、生活リズムとして合っているのかなと思います。年々、絵の方の比率が大きくなっているので、来年はどうなるか分らないですけど。

吉川：収入とか社会保険とか、生きていく上で非常に重要ですからね。ただ、それだけではなくて、作品を作ることが日々の時間の中でどういうふう社会を理解していくか、反応していくか、見ていくか、ということとすいぶん関わりが深いということ、今日は伺ってきました。他に何か質問はありますでしょうか。

観客：品川さんの作品は、子どもの瞳に映っているものに特徴があると思います。写真を拡大してみても、人の瞳の中にその人が見ているものが映っているのを発見して、「ああ！」って思ったことがあるのですけど、瞳に映っているのはこの子が見ているものなののでしょうか。いつもこういう描き方をされていますか。

品川：この作品では宇宙ですけど、他にも顕微鏡写真だったりとか、あんまり日頃、人が見えないもの、普通に生活している時には目に入らないものを瞳の中に入れるようにしています。

観客：この子が見ているとか、そういうことではないのですか。

品川：深層心理ではそうかもしれませんが。子ども

は何を見ているのか分からない時がありますよね。幼くかわいらしい印象のときもあれば、なんでも知っていて見透かされているように見えるときもある。身近な存在の子どもたちをモチーフにはしていますが、何か全然違うものと組み合わせることによって、いつもと違う印象を持ったり、何か発見してもらえる作品になるといいなと思っています。

今後の予定、やりたいこと

吉川：では、これからドローンを飛ばしていただきます。その前に最後、それぞれの今後の予定ややってみたいことなどを聞きたいと思います。

川崎：実物を見てもうることが少ないので、展示のお話があれぱうれしいです。ネットで作品販売もしています。そちらはそっくりなものだけではなく、かわいいやつなんかを作っています。豆サイズの柴犬とか、楽しいです。

小林：僕はドローンで撮った工場夜景の写真集を出しました。ドローンで撮影した写真の展示やグッズの販売なんかもします。ホームページやFacebook でチェックしてください。

品川：熊本と台湾で展覧会に参加します。一月には京都の庵町家ステイで展示する予定もあります。今後は、自分が見たい、自分がワクワクするような世界観の作品を作れるように、制作面でもチャレンジしていきたいです。

三枝：高崎でアートプロジェクトに参加します。商店街の路上や空き店舗を使ったものですが、そこで行商をしようかなと思っています。行商といっても、実際にものを売ることはできないのでパフォーマンスになると思います。A-Lab で2回連続で展示をしてみて、私の作品は常に動いているもので、そこが大事だと思いました。アーティストの小沢剛さんが、「展示の始まりは八百屋だ」と話してくださったことがあります。野菜を道行く

人たちに見てもらうため、垂木を一本挟んでちょっと斜めにする。それが人に何かを見せるということの始まり、展示の始まりである、と。そんな、垂木を一本挟んで見せるようなことがしたいです。

大洲：ちょうど今、青森で出展している展覧会が巡回します。巡回展といっても、僕はそれぞれの土地の車窓を作品化していくので、展示されるのは全部別の作品になります。他にも展覧会の予定があります。今回ここで展示した作品は川や水が作品のキーになっているのですが、そこでも水をキーにした車窓のインスタレーション作品を発表する予定です。私は、自分が作ったものを振り返りながら次のものを作る場合が多いので、今回の制作をフィードバックさせながら次の展覧会を作っていくことになると思います。現在進行形で制作を続けていきます。

吉川：今日話を伺って改めて感じることは、私たちの生活の中で、ちらっと一瞬垣間見える何かを、ちゃんと拾い集めてその関係を自分の中で咀嚼して形にしていく。そういうことが美術、表現の世界なのではないかな、ということです。では最後に、ドローンを飛行させていただけます。これは普段撮影に使われているものですか。

小林：普段はこの10倍くらい大きなものを使っています。ですが、これも使い方によっては本格的なものが撮れます。ジンバルという機構で水平を保つことができますし、4K 動画にも対応しています。最近のドローンは外観もスタイリッシュです。このゲーム機のようなコントローラーを使って、21 枚合成する時のドローンの動きを見ていただけます。

(ドローンが浮き上がり、上空で一定の位置をキープしながらゆっくりと回転する)

昔のドローンは室内で安定させて飛ばすのが難し



ドローンの飛行の様子

かったのですが、最新のものはできるようになっています。屋外ではGPSによって室内より安定して飛ばすことができます。バッテリーは実質15分くらい。海の上や川の上で飛ばすことが多いので、常に落ちてしまうのではないかとこの恐怖感があります。

吉川：小林さん、どうもありがとうございました。最後に改めて、5人のアーティストの方に拍手をお願いします。今日はどうもありがとうございました。

A-Lab Workshop

山の日ワークショップ かたちの先を想像する - しいたけの木 -

日時：8月11日（土）午後2時～午後4時
講師：三枝愛

しいたけ栽培に使われることのなかった原木に触れ、それにまつわる話を聞いた後に、そこから生えてくるはずだったしいたけを想像して絵を描きました。



紙に印刷された原木に、しいたけの絵を描き加えています



描いた作品を自分たちの手で展示し、みんなで鑑賞



ワークショップで描かれた作品

360度写真で、新しいまちの魅力を しょう！

日時：8月19日（日）
午前10時／午後3時
講師：小林哲朗
カメラ提供：リコーイメージング株式会社

360度撮影カメラ「RICOH THETA（リコー シータ）」を持って市内を散策し、参加者それぞれが気に入った景色を撮影しました。その写真をスマートフォンアプリで加工し、普段とは異なる視点から尼崎のまちを眺めました。



先端に THETA を取り付けた自撮り棒を手に、市内を散策



ワークショップで撮影された作品（撮影：小林哲朗）

木彫りブローチを作ろう！

日時：8月26日（日）午前10時～午後1時
講師：川崎誠二

木彫りのブローチを作りました。カラフルで可愛い花やスイカ、ピザのブローチが出来上がりました。



彫刻刀でブローチを彫り出します



アクリル絵の具で彩色



出来上がった色とりどりのブローチ

木彫りの箸置き作り

日時：8月26日（日）午後2時半～午後5時半
講師：川崎誠二

木を彫刻して箸置きを作りました。本物そっくりのオクラ、唐辛子、枝豆の箸置きが出来ました。



オクラ作り。まずは先端を彫ります



本物を見ながら着色



ヘタの部分は丁寧に



個性豊かなオクラ・唐辛子・枝豆の箸置き

